

最初にそれを意識した時の記憶は：定かではない。物心ついた時からこうだったから。死。みんなはどれくらい死を意識したことある？：死ぬこと、死のうと思つたこと、死をそばから見たこと：人間に限らず、死はあらゆるものに訪れる。私の頭の中は：死で充満していた。いや…、正確には死への恐れかなあ。私は：日々の生活を強がって送りながらも、心の中では：死への恐れをとでもたくさん抱いていた。

「死は怖い」

「死ぬのはイヤ」

「死を見るのもイヤだ」

「死を：命の終わりに触るのが：イヤなの：」

ありとあらゆるものに：いずれ死は訪れる。父にも母にも：大好きな友達にも、ウチで飼つてる犬のトートーにも：。：そして私にも。この世にこれほど恐ろしいことはない。：精神的な病とも言えるべきレベルで、私は死を恐れた。目の前で虫や小動物の死骸を見ると、問答無用で吐き上げてしまう。：。そして、ガタガタと奮えて、半日はへたり込んで：動けなくなってしまふ。そういう私を、クラスの人たちは不気味がっては変人扱いし、こぞって後ろ指を差した。：ただ一人の友人を除いて。

「：あーやーちゃーんっ！学校：遅れる：よーんっ！」

親友の朱里は、いつもウチの家の前で叫ぶ。朝七時五十分。学校までは歩いて十五分くらい。八時十五分の朝の会が始まるのに合わせての時間としては、少々早い。それは私が朝の準備に時間がかかるのを見越してのことだった。彼女が急かさないと、はからずとも私は遅刻してしまふ。

「あかりっ！お早うっ！ちよつと待ってっ！」

私は食パンを口にくわえたまま、ランドセルを肩にかける。朱里は、

「：ふふっ、あやちゃんってば：またお寝坊さん：」

言つて、靴先をトントンと地面に当てて、かかとを直す。私は玄関の扉を跳ね開けて、朱里のそばへと駆けていく。

「お待たせっ！」

朱里の手を掴んで、小走りで行く。

「：大丈夫だよ、文ちゃん。：ちゃんと間に合うよ」

彼女は、私に手を引かれて、トットツと前のめりになって歩く。彼女という時だけ：親友である彼女という時だけ、私の心は和らいだ。：こうしている間にも、世の中の何かが確実に死に絶えている。そして、：私の寿命も、他の生きているすべての生命の寿

命も減っていつている。…そう考えるだけで…胃液の酸っぱい味が口に思い出されて…吐きあげそうになってくる…。確実に忍び寄る死…そしてそれを恐れる私。恐れに似た感じの思いは、常に私の頭の中のどこかで渦巻いていた。

もちろん…父や母、学校の先生や朱里以外の友達にも、私が話を出来る…あらゆる人に相談した。私は死を恐れていると、死を見るのが…迫り来る死がイヤだと…。だが誰も私の恐れを理解してくれなかった。…いや、理解しようとさえしてくれなかった。父や母は、

「死ぬこと…それは仕方のないことなんだ。…でもな、文…。それはずっとずっとずっと先のことなんだ。今は何も怖がることはない。精一杯生きて、生きることを噛み締めればいいんだよ」

と笑って、私を元氣付けた。先生は、

「文ちゃん？…人や自分が死んでしまうのは悲しいし怖いよね…。でも、それはみんなが経験することなんだよ。先生はお父さんもお母さんも亡くしてしまったけど…ちゃんと乗り越えたぞ。…文ちゃんほど強い子だったら、きっと先生より上手く乗り越えられるんじゃないかな…」

と言って、私の苦悩を拭おうとした。クラスメイトは、

「そんなこと心配することないよ。別に、今起こることじゃないじゃん」

「文ちゃんってヘンだよ。病氣でもなんでもないんでしょ？元氣なら死なないじゃない？」

と、素っ気ない返事をくれる。

クラスメイトはともかく、もつともらしい言葉を並べて…私を励ましてくれる両親や先生でさえも…、その実、私の気持ちを理解しようとすらしていないことが、子供ながらにわかった。

彼らは今までの人生を通じて身につけた演技力とセリフの巧みさを使って…私の気持ちを理解しようとせず、私を元氣付けようとしていた。…だが、朱里だけは違った。

唯一、朱里だけが私の恐れを理解してくれた上で言う。

「…なにも心配ないよ。もし…文ちゃんが死ぬことがあったら…私も一緒に死ぬ…ね」  
私を守ってあげる…とは言わないのが彼女らしい。彼女の存在とこの言葉が、今の私の大きな支えになっている。だが、朱里が唯一の支えになっていると思えば思うほど…朱里の存在が自分の中で大きければ大きいほど…彼女が死んだ時のことを心に思い浮かべて苦しんでしまうのである。いまや彼女の死は、自分の死よりも怖かった。

ジージージー…と、セミの鳴き声が聞こえる。朱里と二人で歩いていく通学路。私はひと時の癒しに包まれながら…七月の暑さに汗ばみながら…強い日差しに照らされながら…雲一つない透き通るような青い空を仰ぐ。そうして、学校まで二人トトトと歩いて行った。

死に至る病。五歳児の時の私の場合、とりあえずのきっかけは絶望ではなくて、肺炎だった。

高熱にうなされていた私は、五感を感じなくなり、ただ心を攻められているという状態だった。人の形をしていない私の心が、黒いドロドロ、又メヌメとしたゲル状のものに飲み込まれて、それと一体化していく。痛みはまるでない。心地よさもない。思考だけが正常であり、五感には何も感じなかった。…そして私の思考は…幼児ながら、その黒いゲルに絶望と恐怖を感じた。

臨死体験。後の私が人に聞いて調べた話では、光を感じたり、三途の川が見えたり、自分より先に死んだ者と会ったり、トンネルのようなものを抜けたり、死んでいる自分の肉体を見たり、自分の人生のシーンが走馬灯のように思い返ったり…etc…するらしい。けど、私のそれは伝え聞く話とは随分違っていた。

死に臨んでは、心地良さや安らぎを感じる人もいるそうなのだが、私の場合は、絶望から生み出される恐怖以外には何もなかった。黒いスライムのような液状態のものに包まれていく私の精神は、まるで漫画や映画で見えるような…手足を縛られた拷問のようなもので、私に一切の拒否を許さない。そして、私の個という精神や心と呼ばれるものは、黒いゲルと一体化して徐々に消えていく。…これが死か、と思つて、そのまま消えてゆくのか…消えはしないのか…というところまでは覚えていない。

病に犯されて、病床に静かに横たわっている私は…なんとか意識を取り戻して、九死に一生を得たらしい。私が持つこの意識が消えるか消えないか…、という記憶の次の記憶は、随分と飛んでいて…退院後のことしか覚えていない。

身体は五体満足で後遺症は無く、外見は何事もなかったかのように回復していた。しかし、心には死への恐怖が生まれていた。それは死という存在の自覚と、ペットの死や交通事故死した友人という身近の者の死を見る…という実体験を通して、次第に大きくなっていった。

命とはなんだろうか。死とはなんだろうか。痛みとはなんだろうか。死んだ先はどうなっているのだろうか。それらすら私にははっきりとわからない。私は、正体不明の化け物と戦っている。今まで誰も…決して勝てなかった死という名の化け物と。

学校から帰るとき、朱里はいない。彼女は兄と一緒に生徒会に属しているため、ほとんどの日において、私とは帰宅の時間がずれるのだった。朱里がいなくて、日が暮れようとして、ほんの少し辺りが涼しく、肌寒くなることもあって…私はトボトボと足取り重く歩いていく。そしていつもの公園を前にと、いつものごとく立ち寄り帰ろうとしてうなだれて歩く。

私や朱里が住む花園という地域…そこは住宅街であるため、いくつかの公園が近くにあった。それなりの広さがあって、遊具や木製のベンチなども設置されているため、近所の幼児連れのお母さんや小学生の遊び場となっている。

辺りを見回す。幼稚園くらいの男女がワイワイと走り回ってるほか、ベンチには同じ

年くらいの子が座っている。犬の散歩をしているお爺ちゃん、赤ん坊を連れお母さんたちが井戸端会議をしている。

この公園の風景は毎日のことだった。私も含めて常連さんである。毎日見る顔ぶれ：この名前すら知らない知り合いの人たちも：いずれ時が来れば、死を迎合して：この世から消えていなくなってしまう。

私はまたもやそんなことを考えながら：ブランコに腰掛けて、ゆっくりと体を揺らした。ブランコの鉄の部分は、大変に古ぼけていて錆びている。部品が擦れてキィキィと寂しげな音を立てた。まるで、私の心の痛みの嘆きを音で現わしているかのような…。何も知らない子供達は、きゃあきゃあど騒いで楽しそうに遊んでいる。ランニング姿のおじいさんは、犬が行きたい方向とは別の方向へ犬を引っ張りまわしては、公園内を散歩する。立ち話に花が咲くお母さんたちは、子供が足にまとわりついて遊んでいるのも無視して、世間話に集中している。：そしてベンチに腰掛けて、公園内の人の様子を寂しげな表情で見る女の子：彼女は私と同じで学校帰りなのか、脇に赤いランドセルを置いていた。小学生くらいに見えるが：私は彼女を学校で見たことはなかった。

おぼろげな意識で公園内を見渡しながらも：心は死への恐怖で満たされている。もはや自分で自分が病気だろうと判断できるほど：私は死を恐れている。しかし、これも自覚していることだが、私は心の芯は強く、勝気で負けず嫌いな性格だった。私は体も大きいし手足も長い。幼稚園や小学校の低学年の時など、同級生はもちろん、上級生の男子とケンカして勝つほどの負けん気の強さと腕っぷしを持っていた。私自身、そんな男に負ける気もしなければ、足元を見せるつもりもなかった。そして、十一歳になった私の私が最近考えることは：この死の恐怖を克服することだった。

「濱中文『死』」

ボソリと独り言を言う。ふと視線を感じて：その先を見ると、ベンチに腰掛けた寂しげな目の少女がこちらを見ていて：バチリと目が合った。私は目を逸らして、考え事を続ける。

：人はみんな死ぬ。不死などありえない。死を克服するなんて：私でなくても不可能に違いない。：ではどうするか。死を取り除くのではなく、死の恐怖を取り除くしかない。死を恐れなくなれば：私は死を意識することもなく、いざ臨終の時になっても、取り乱さなくてすむかもしれない…。

「…でも：どうやって：??？」

私は、あまりにも敵が大きいことを：改めて意識して涙が出てきた。：他人が行っているのは、死そのものを今の自分には起こりえないものだと思えて、何も考えていないだけだ。死を恐れていないのではなく、自分は死に縁がないものだと思っている。何の根拠もないのに：刻々と迫っている寿命の切れる時を、自身には来ないものだとして、樂觀視しているに過ぎない。

「幸せな人たちだなあ。……なぜ私は気づいちゃったんだろ…」

子供たちがキャッキヤと遊ぶ声に。かき消されてしまうほどの小声でそう呟く。

あの黒いドロドロとした液体に飲み込まれるのだけは…もう二度と体験したくない。たとえその先に待っているのが天国だとしても…私はあれには二度と…触れたくない。

「…あや…ちゃん…」

名を呼ばれて、うつむいていた顔を上げると…そこには朱里がいた。

「…もう日も暮れるのに…暑い…ねー」

朱里は笑顔でそう言う。私は、

「うん。生徒会、もう終わったの？」

と返答する。彼女は、

「…うん」

と答えて、

「…帰ろ」

と、私に手を差し出した。

私はブランコのチェーンを持っていた手を外して、朱里の手を握った。彼女は、よいしょ！と、私を立ち上がらせるように手を引っ張る。

…辺りを見回すと、お母さんたちは子供を連れて帰ろうとしているし、犬の散歩のおじいさんはすでにいなかった。きやあきやあと騒いでいた子供たちも二、三人に減っている…ただ木製のベンチに腰掛けてこつちを見ている少女だけは…私が来たときのまま、まるで彫像のように動かずに、こちらを見たままだった。公園を後にしようとする。

朱里は、

「…あやちゃん、また…死ぬってコト考えてた??」

と、心配そうな表情でたずねる。

「うん…少しね」

私がそう答えると、彼女はきつく私の手を握り締める。

「…気休めにもならないけど…私はずっと…一緒にいるよ…あやちゃんと…」

言って、

「…死ぬときも…きつと死んでからも…ずっと…」

続ける。

私は彼女の気持ち嬉しかった。でも…それと死への恐怖とは話が別だ。私は自分のためにも、そして私を心配してくれている朱里のためにも、死の恐怖への対処法を考えなければならぬ…と強く心に思った。

「…あーやーちゃんーん！…おはよーっ！」

朱里が来た。私はいつものごとく朝食を口にかき入れて、ランドセルを肩にかける。

「行ってきますっ！」

お母さんに言って、朱里の手を掴んで学校へ向かう。

「…あやちゃん、ちゃんと宿題やった??…算数の…」  
朱里が言う。

昨日家に帰ってから、一応は手をつけた…算数の宿題。最近、学校や公園にいる時だけでなく、家に帰っても死についてばかり考えている。…ただ、内容が少し変わった。今までは、純然な恐怖の心だけだったが、昨日…公園で考え込んだ後は、恐怖への抵抗の心が、少なからず生まれていた。私はなんらかの手段を見つけて、この恐怖心に打ち勝つ。そう考えると…具体的には何も策がなくとも、少しだけ恐怖心が和らいだ気がした。

「うん、一応やったよ。黒川先生に怒られたくないもんね」

笑って答える。朱里は私の…少なからずも明るくなった顔を、ホッとした表情で見ている。

学校が終わる。朱里は今日も生徒会の用事で居残りだ。私は昨日よりは幾分か軽い足取りで、学校を後にした。公園の前を通る。…今日も寄っていきこう。

今日は、例のごとく井戸端会議のお母さんたちと、子供たち…昨日いた幼稚園児のかわりに、中学生くらいのお兄ちゃんたちが、数人でサッカーをして遊んでいる。犬と一緒に公園をぐるぐる回って散歩するおじいさんもいる。…木製ベンチには、昨日目が合った女の子もいる。脇に赤いランドセルを置いて、白いワンピースを着て…大きな麦藁帽子を被っている。靴は男の子が履いていそうな黒くて大きいスニーカーだ。

彼女は公園に入ってきた私をちらりと見た後、足をブラブラさせて、公園にいる人を見ている。…また瞬間目が合った。私は特に気かけずに、いつものごとく、ブランコに腰掛けてユラユラと体を揺り動かした。…ブランコもいつものごとく、キィキィと泣いている。私もうつむいて考える…そう、いつものごとく。

…死への抵抗…か。…そもそも、人は自分がいつ死ぬかなどわからない。死病を患ったとしても、自分の死期はおおまかにしかわからない。健全な人間ならば、普段は自分の死なんて意識しない…。

原因だつて様々だ。病気で死ぬ人もいれば、寿命で死ぬ人もいる。事故で死ぬ人もいれば、殺される人もいる。自殺する人だっている。赤子の時に死ぬ人もいれば、百年を超えてから死ぬ人もいる。死へ至るプロセスがわからない。…それはまったくのランダムで、人間の意思も希望も介さない。

まるで目に見えない…人間より上位の存在に首根っこを掴まれて…痛ぶられているかのような…不条理なシステムだと思った。ここまで思考して、まるで抵抗手段を思いつかないことに絶望する。絶望は更なる恐怖を生む。私はどうすれば…。

空は夕暮れ。日が赤く染めている。…カラスが寂しげに鳴いていた。

「ううう…。グスッ…」

私は死のことを考えて泣き出す。…いつかは必ず消える命の炎。…消えたくない、消えるのを見たくない…。

肺炎で死にかけた際に生まれた死への恐れ……その死の恐怖を大きく増進させたのは、ペットの死と友人の死だった。トートーは、私が三歳の頃から飼っていた犬だ。彼は私といつもじゃれあい、兄弟がいなくて両親は共働きという……私の家での良き遊び相手だった。……でも、私が九歳の時に、病気で亡くなってしまふ。両親はこれを機会にと、私に生命のあり方と死のあり方を教えた。私は子供ながら、薄っすらとした知識はあったが、実際に身近な存在の死を目前で体験して、死の恐ろしさを知った。

……ほんの数時間前まで、確かにそこに存在したトートー。しかし……今は、それはトートーではなく、トートーの抜け殻の肉片になってしまっている。大好きだった存在との別れの悲しさもあったが……それよりもとにかく不明と謎に包まれた死の存在が怖かった。

「ああ……トートーは、きつとあの黒いドロドロしたものに包まれて……這い上がるのが出来なかったんだ……」  
私が言う独り言に両親が答える。

「トートーは、お空の上の天国に行つて、幸せに暮らしているのよ。いずれはみんなそこに行くの。そこでまた幸せに暮らすのよ」

……私は両親の言葉を鵜呑みにはできなかった。あの黒い液体に包まれた先に、そんなものがあるとは思えなかった。死はどれだけ考えても……どれだけ勉強しても解明できない……なのに、それは確実にはつきりとこの人生の最後に存在する。……回避する方法はない。……せめて、いつ来るのか……その後はどうなるのか……どういう意味があるのか……わかつていさえずれば……、まだ心が落ち着くというのに。

もう一つ……、友人の死は私に理不尽さを教えた。ほんの一年ほど前の話だ。小学校に入学して以来……私は朱里とその友人……薫君と二人で学校に通っていた。卒業までずっとそうなるはずだった日常……そうなるはずだったのに、不条理な死は、躊躇いもせずを襲った。

当時通学路にあった、建設中の病院の看板が落下し、数歩先にいた朱里と、靴紐を結び直していた私との間にいた……彼を直撃したのだ。……朱里は前を見ていたため、その瞬間を目にはいかなかったが、靴紐を結び直して前を見た私は……その瞬間を目撃した。彼が死に喰われる瞬間を、至近距離で経験した。友人が……友人だった物……に変わる瞬間の出来事。……今の今までそこにあった命が、なんの前触れもなく消える出来事。……予想も抵抗も覚悟もできない出来事。……私はそれを間近で見た。

一瞬の惨劇が、目に焼きついたショックより先に……友人を一瞬にして失った悲しみより先に……他にも落下物がないかなどの心配より先に……私に、死に対する疑問を生まれさせた。

「……なぜ彼なの？」

あの時、なぜ私でなく、朱里でもなく、他の誰でもなく……彼だったのだろうか。そして、心の底から……この理不尽を恐れる感情が一気に吹き上がってきた。こうしてる間に

も：死を誘発する何かが、私や私の周囲の人に迫っていて、ポンと命を消し去ってしまったかもしれない。一瞬先に用意されているという可能性を否定できない：確かな死の存在が、私を恐怖のどん底へと突き落とした。

死への恐れ、永遠の別れからくる悲しみ、その際に生じるであろう肉体的な痛み、これらを恐れることから生じる精神的な苦しみ：死に関することすべては、総じて私を脅かした。

この深く重い死への恐れ：は、私にノイローゼをもたらした。薫君の死によって、私の死への恐れは、ますます酷くなって、恐怖のあまり夜中に泣き叫んだり、吐いたり、痙攣したり、失神したりした。また、微熱が収まらずに、ストレスから顔や手足が麻痺したりもした。

…朱里に連れられて：かろうじて、学校にだけは行っていたが：両親も私を見かねて精神科医やカウンセラーに診せる始末だった。数ヶ月かかって：精神科の医師とカウンセラーの治療、両親や朱里の支えで、私はどうにか日常に復帰したが：それ以来、思考の中のほとんどは、死への恐怖で埋め尽くされてしまった。

「…あや：ちゃん…」

呼ばれて我にかえる。朱里が目の前にいる。朱里は笑顔で私の手を引いて言う。

「…帰ろ、…あやちゃん」

私は朱里にたずねる。

「朱里、薫くんのこと覚えてる？」

朱里は悲しげな表情を作って答える。

「…もちろん：覚えてるよ」

彼女は私の心情を察しながらも、何を言っているのかわからない：けども、それを私に悟らせたくない：という態度を取る。朱里は嘘が下手だ。でも、そんな朱里の気遣いが嬉しかった。朱里はいつも私に優しい。

「いいの。なんでもない。ごめんね、朱里…」

朱里は、泣きそうな目で返答した。

「…私こそごめん…ごめんね…なんにもしてあげられなくて…」

私は、昨日とは逆に：朱里の手を引いて帰ろうとする。ふと公園を振り返った。時刻は六時半：昨日、公園を後にした時間よりも遅い。公園にはもう人はいない。ただ、木製のベンチに少女が座っているだけだ。

（あの子、いつも長い時間一人で座って、いったい何をしているんだろう？？でも、それは私も一緒か…）

私は登校の時と同じように、朱里と手を繋いで家に帰った。

来るべき死への抵抗手段…。相手の正体がわからない以上は為す術がない。夜、枕に突っ伏して考える。暑い：今夜は熱帯夜だ。この晩の私は、死への恐れへの抵抗手段を見つけることはできなかった。

「明日：誰かに聞いてみよう」  
そう、自分でわからない以上、誰かに頼るしか手段はない。そう思った。

次の日：セミはここぞとばかり、ジージーと鳴いている。一昨日も昨日も今日も…雲一つない快晴だった。今日は早起きできて、両親と一緒に朝食が取れる。

「ねえ、お父さん？とてもとても怖いものがあつてさ、自分でそれに打ち勝とうと思うとき、お父さんならどうする??」

朝のお父さんはいつも機嫌が悪い。お父さんは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに、「うーん」

と考え込む。私の朝食を持ってきた母が、笑って答える。

「相手はなに?…怖い夢とか?お化けとか?」

私は、薫君が亡くなったときのノイローゼの事を考えて、「両親に心配かけないようにと誤魔化した。

「うん、そんなものかな。とにかく得体の知れないものなの」

私は精一杯の作り笑顔をする。考え込んでいた父が答える。

「お父さんだったら、とにかく戦ってみるかな。戦ってみて、勝てそうになかったら一度逃げて、また準備してから戦えばいい」と笑って言った。

…恐怖心とは常に戦っている。負けるのは時間の問題…今の状態では、とても勝てそうにない。準備すると言っても…私に出来ることは限られている。今まで散々思考してきたけど、準備としてまったく新しい次元の方法を用意するか…まったく別の力を用いるか…しかない。

「…あーやーちゃーん!!…おはようっ!!」

朱里だ。

「ほらほら、朱里ちゃんが迎えに来てるわよ。早く行ってらっしゃい」

お母さんが私のランドセルを持ってきてそう言う。私は、

「うん、お父さんありがとう!」

と、できるだけ元気な声で言つて、玄関に出る。父は心配そうな顔つきをしていたが、私がリビングを出るときには、笑顔で手を振って送ってくれた。いつものごとく、朱里と手を繋いで学校へ向かう。

「あやちゃん、おはよう♪」

朱里は上機嫌だ。私は朱里にも問う。

「ねえ、もしもね、朱里にね…とてもとても怖いものがあつてさ、自分でそれに戦つて決めたとき…朱里ならどう戦う??」

朱里はその一言で気付く。

「…死ぬことのこと…だよね?」

私は黙ってコクリと頷いた。朱里は少しの沈黙の後、静かに言った。

「…ごめんね、私にはわからない…。でも、死じゃなくて…ただ、とても怖いものと戦うんなら…私なら…勇気を振り絞ってチャレンジしてみたい…。たとえそれで失敗したとしても…精一杯やったんなら…後悔はしないと思うから…」

そう言っ、朱里はもう一度、

「ごめんね」

と、付け足した。

そうだ。確かに自分の全力をもって戦えば…なにかしら光が見えてくるかもしれない。今までは恐れるがあまり、腰が引けてしまっていたのかもしれない。

「朱里…私、死への恐怖を克服しようとしているの。ただビビってばかりじゃ、人生ずっと暗いままだもん」

「…朱里にはたくさん迷惑かけて…、ずっとずっと…。私が恐怖に打ち勝つまで、こうして手を繋いで、一緒にいて欲しい」

朱里は笑って答える。

「…うん、…私、あやちゃんなら勝てると思う。…だってあやちゃんくらい強い人…わたし、他に知らないもの！」

「…それに…わたしはずっとあやちゃんと…一緒にいるよ！…だから急ぐことない…どうなっても…わたしたちはずっと一緒…だから」

私は素直にその言葉を受け入れた。

「ありがとう…、ありがとう、朱里…」

学校に着く。上履きに履き替えて教室へ行く。朝の会が終わって、職員室に行く先生をつかまえた。

「先生、黒川先生っ」

担任の黒川先生はとても静かで、大人しいお爺ちゃん先生だった。怒るときや叱るときもとても物静かで、語りかけて諭すように怒るので…生徒からは優しいお爺ちゃん先生だと言われて、慕われていた。

「あ、あ〜…なんだい？？濱中さん…」

先生はゆっくりと私のほうを向いて、ゆっくりと返答した。先生が持つ独特のゆったりさは、朱里が持っているのんびりとした雰囲気とよく似ている。口調のテンポも同じ感じだった。

「私、先生に質問があるの」

先生は？？…なにかな？、という顔で私を見る。私は、

「先生…は、死ぬの怖いですか？死ぬのが怖くてたまらない時…、自分でその恐怖に打ち勝とうとするとき、先生はどうしますか？？」

と、ストレートに…正直に質問した。先生は私の心や恐れのこととは知らないはずだ。だ

から遠慮なしに聞ける。彼はしばらく考えて、ゆつくりと口を開いた。

「あ……あく、……そうだね」

また間をおく。

「……僕も……死ぬのは怖い。……だけどそれは人なら……命を持つものなら、誰でもが……そうなる運命だよね……」

「あ、あく……昔……僕の先生……先生の先生はね……。死は怖がるものでも、避けるものでもないと言っていたんだ……。死は、その人が精一杯生きた結果だから……むしろ人生を全うしたことを……喜ぶべきものだよね……言っていたよ……」

言葉をつむぐ。ゆつくりと。

「……だから濱中さんも……物事の死は恐れるものでない……と考えたらどうか……?」

先生はそれだけ言うと、微笑して職員室へと去っていった。私は一人残されたまま、先生の言葉について考えていた。

「死は……その人が精一杯生きた結果……」

でも、人生は……薫君や、彼よりもっと短い人もいる。生きたいと願いながらも、悔いを残しながら亡くなっていく人も大勢いるはずだ。それなのに、精一杯生きた結果ってのはおかしい……。それに、現に私自身が死を恐れている……気が狂いそうなほど……。恐れるべきものではない、喜ぶべきものだ……と、言われて……ハイ、そうですねなどは、到底納得できない……。

「でも……人によつては精一杯生きて……胸を張って死んでいく人もいるはずだ……」

その差は何からできるのだろうか……。幸せに人生を送る人、恨みながら人生を送る人……、特に何も考えずに人生を送る人……。私は精一杯生きて……満足して死んでいくのかなあ……?……それはわからない。私の死の時まで、誰にもわからない。

授業が終わる。放課後になって、私は早々と学校を後にした。朱里は今日も生徒会の用事があるので、下校は遅い。私が公園にいれば、きつと今日も立ち寄ってくれるだろう。朱里がいない……一人で歩く過程は、私にとって……とても辛くて心が痛む時間になる。いつもの公園に着く。木製ベンチに座っている少女が見える。

(あの子も毎日いるなあ……。私より先にいて、私が帰るときもまだベンチにいる……)

公園に入る際に……またバチリと彼女と目が合う。すぐに目を逸らして、ブランコまでとぼとぼと歩く。子供たちのかくれんぼの声が聞こえる。

「はーち……!……くうーうー!……じゅうーううー!……もういーかいつ……!……?」

「まー……ただよ……!……!」

お母さんたちの井戸端サミットも開催中だ。幼児たちも砂場ではしゃいでいる。……大の散歩のお爺ちゃんもいる。互いの歩道が交差するため、ブランコに辿り着くまでに、彼に接近する。最も近くなったところで、

「……お爺ちゃんは、死ぬのって怖くないですか……?死への恐怖と戦ったことありますか……?」

と、私は彼に唐突に問うた。

今にして思えば、当時の私の恐れは、人に問うこと…人との接触で癒されている部分が確かにあった。私の問いを聞いたお爺ちゃんは、不思議な顔で私を見つめた…。そして神妙な顔つきに変わる。

「…俺はお嬢ちゃんより早く死ぬだろうねえ…。でもな、不思議と死は恐れておらんわい。人間は死ぬのを恐れるものなのかもしれない。でも、昔から偉い学者さんや宗教者たちが、死についての話をしてるからな」

「そんな偉い人たちの話を聞いていると、不思議と恐れはなくなるもんだよ…」  
そう続けて、

「お嬢ちゃんには難しい話かもしれないけどな。…気になったんなら、学校の先生にでも聞いてみるとええ」

私がお礼を言うと、お爺ちゃんはニツコリ笑って、犬の散歩に戻る。…そうか…きつと昔にも、私と同じ辛い思いをした人がいたんだ…。そういう偉い人たちは、すごく勉強して…きつとこの恐怖心を克服した…それが宗教とか、倫理や道徳というお勉強の元になったのかもしれない。

…今度ウチに来るお坊さんにでも聞いてみよう。…勉強すれば、どこかにこの恐怖心を克服する方法があるかもしれない。…それでなくても、理解さえできれば…自分で対策を思いつくかもしれない。

私はいつものごとくブランコをキーキー鳴らして、体を前後させた。希望の光が少しだけ見えたせいか…今日は幾分か気分が軽い。でも…今から勉強してだなんて、遅すぎるんじゃないだろうか。なんとって、この恐怖心は…今にも私の心を黒く覆ってしまいたいそうだったから…。それに、あの憎き死というものは、こうしてる今にも…私にガツンと襲い掛かってきてもおかしくない…。

私はブンブンと首を振って、冷静さを取り戻す。朱里や両親がいなければ、今頃私は狂ってしまったっていただろう。それでなくとも…四六時中、死の事ばかり考えてて…いまや、まったく知らない人にまで話しかけて相談する始末だ。

「私は…どうなっちゃうのかな…」

頭を抱えて独り言を言う。もう死ぬなら…いつそのこと、今バツサリと欲して…。そして、またあの黒いゲル状のものに覆われて…。そう考えると…頭痛がして、吐き気がしてきた…。

(…しまった…想像しすぎた…ううう、気持ち悪い…頭が痛い…)

彼女と話したのは、その時が初めてだった。

「…あや…ちゃん」

私を呼ぶ声が聞こえる。

「朱里…」

朱里が来てくれた…。私は少し気分が良くなって、うつむいていた頭を戻して、彼女を

見上げた。…だが、そこには朱里はいなかった。…代わりに、いつも木のベンチに座っている少女がいる。

漆黒のワンピースに赤いリボン。黒のソックスに、こないだも履いていた大きい…まるで男の子が履くようなスニーカー…。赤のランドセルを背負って…ワンピースとは正反対の色の白くて細い手足は、この外気温に相反して…とても冷たげだった。私は思わず、

「???…あなただれ??？」

と、問うた。彼女はスツと、ストレートで真っ黒の髪をかきあげて耳にかけると、

「文ちゃん♪…私ともお話ししようよ♪」

と、語尾を歌うようにして言って、隣のブランコに座る。隣のブランコもキーキーと音を立てて揺れる。私の音よりも幾分か…明るくて余裕がある音…。私はためらわずに言った。

「…あなたは死ぬの怖くない??…死の恐怖って感じたことある?」

彼女は私を見て、微笑して答える。

「私は感じたことない。…でも知っているわ」

(感じたことないけど…知っている?…バカみたい)

「感じたことないのに…知ったような口きかないでっ」

…自然と感情が高ぶり、私は強い口調で言った。彼女は、私を見ながら言葉を紡ぐ。

「悪かったわ。…でも本当のことなの」

言って、続ける。

「あなた、こんなに怯えて…。触れたことあるんでしょ?自分か、他人の死に…」

彼女は微笑したままだったが、口調は極めて真剣だった。

「私は知っているよ。…解決法」

…解決法??その言葉を聞いて、理解して…私は目を見開いた。…私が、望んで望んで望んで望んで望んでいることを…この子が知っている!??

私は藁にもすがる思いで、彼女にすべてを打ち明ける。涙ながらに。肺炎のこと、トートのこと、薫君のこと、ノイローゼのこと、死への恐怖のこと、黒い液体のこと、なんとか抵抗したいということ、支えになっっている朱里と両親のこと…すべてを、まるで神に懺悔しているかのように…名前も知らない少女に話す。彼女は、私を見ながら黙って話を聞いていた。私は哀願した。

「…本当に解決法があるんなら…教えて欲しい。私は死に…打ち勝ちたい」  
彼女は私を見つめたまま、少し間を置いていった。

「あなたが考えているとおり…死からは逃れられない」

「でも、あなたが考えているとおり…死への恐怖は克服することができる」

言って、

「…死と同じものになるのよ」

と、付け足した。彼女が言っている言葉の意味がわからない。

「ど、どういうこと??」

彼女は続けた。

「あなたが死そのものになればいいのよ。…つまり、死と同化しろってこと」

(言っていることが矛盾している。死を恐れているのに…死ね…と言っているの??)

「…別に死ねと言ってるわけではないわ」

彼女は私の思ったことをピタリと当てると、溜息を交じえて返答した。

「…難しいことを言っても、きつと理解できないだろうから、簡単に方法だけ言うわ」  
言って、続ける。

「あなた…もう一度、その黒い液体に満たされなさい。…今度は逆らわずに…でもそれに負けないようにして…逆にその液体を取り込んでしまうような…そんな心持ちで満たされるの」

(う…それは…)

「そうすれば…とにかくそうすれば、解決すると思うの」

彼女は、途中の詳しい説明をしようとしたけど…やっぱりやめた…という感じで、話を切り上げた。

…初めて聞いた具体的な対策法。そう言えば、私が質問した人たちはみんな…抽象的な物言いばかりで、具体的な話は何もしなかった。彼女の言葉には…意味こそよくわからないけど、なにか真に迫る感じで…どこか頼れるような力強さがあった。

「でも…私の恐怖のほとんどは、あの黒い液体にあるの…。あれにもう一度触れるなんて…」

彼女は、

「あはは」

と笑って、返答した。

「あなた、さつき自分で自分は強いって、言ってたじゃない」

「きつと…次にその黒い液体と対面した時が、あなたの人生の正念場になる…」

「だけれど…なるようにしかならない。あなたは…きつと…」

彼女はそれだけをゆっくりと言って…微笑したまま、急にスクと立つ。ブランコの鎖がうねってシャンシャンと鳴く。ふと公園の入り口を見ると、朱里の姿が見えた。木製ベンチに座っていた少女は、朱里をチラッと見る。そして、

「じゃね…あなたの健闘を祈っているワ♪」

と、朱里がいる方とは反対側の出口に向かって歩いていく。私は、

「…あ、ちよつと待って！」

と、止めたが…彼女は後ろ向きそのまま、手を少し上げて振って…そのまま公園を後にした。ちやうど彼女が公園を出て行くくらいの時に、朱里が私のそばまで来る。

「????あやちゃん????今のだあれ?お友達??」

私は彼女ともっと…もっと深い話がしたかった。…そして詳しい話をして欲しかった。初対面にもかかわらず、私の苦悩を理解してくれた少女…。なんだかんだ言って…具体的な抵抗方法を教えられた今、私の心には希望が生まれていた。今まで何の対策手段もなかったけれど…、一つ抵抗の手段ができたと思えば…、自然と心の恐れが薄れていった。

「いや、知らない子なんだけど…」

朱里は??となっていた。私は朱里の手を取って、

「さ、帰ろう…」

と促す。朱里は、私の気が晴れている表情を見て、喜んで私の手を引っ張る。そして、家まで先導するように走った。

ベンチの少女と話をしてから数日…あれ以来、彼女は公園には来ていない。もう公園には来ないな…と、直感めいたなにかしらを感じる。

給食を食べた後の昼下がり、黒川先生の発するゆっくりの静かなトーンによる授業を聞くのは、ある意味苦痛だ。…眠くてたまらない。朱里は、私の前の席で熱心に授業のノートを取っていた。

…でも、少し前は死について考えていて…眠くなるなんて状態じゃなかった。あの少女と話して、その晩に考えをまとめた。それ以来の私の思考は、ここ数年では初めてというくらい安定していた。

次にあの黒い液状のものに出遇ったら…気持ちをすっかり持ったうえで、逆らわずに、逆にそれを取り込むような心持ちで一体化する。ベンチの女の子の話では、それで死と同じものになって、死への恐怖心を取り除くことができる…はずだ。

それはそれで恐ろしいことだったが、私は我がことながら、自分は根本の部分では芯が強いと思っている。黒い液体に怯えながらも、逆にその瞬間を待ち望んでいる挑戦的な自分がいることに気付いていた。ここ数日の心の安定は、そうした強い心の面と、具体策の実行へ賭ける希望が作り出しているのだろう。

「確かに。次が…私の生命の正念場になるわ」

ポツリと言う。朱里が(??)と振り返る。私は笑って、

「なんでもないよ」

と、小声でささやく。朱里も少しだけ微笑んで前を向き直す。

あの黒い液状のものこそが、死そのものなんだと思う。人が死神だとか、臨死体験だとかを説明するとき、きつとあれと同じものを体感して、それを語っているに違いない。体験者の表現方法の違いで、言葉尻に差異が生まれるだろうけど…きつと同じものだ。

あれを逆に取り込む。私に…できるのかなあ??…しかし、一旦なにか策ができれば強気になれる。今までのノイローゼや苦悩は、死があまりにも強大な上に、謎に包まれていて…何もなす術がなかったことが原因だったのではないか、と今は思う。それは一

つ策ができただけで、現状は何も変わらないのに、こんなにも強気でいられる実感から確信できることだった。

帰り際に公園の入り口を通る。いつものメンバーがいる。ただ：木製のベンチには誰も座っていないかった。もう：この公園にも用はない。私のやるべきことは、もう決まっていたのだから。

ベンチの彼女が言った抵抗策を聞いて以来、私の心の比重は変わった。死への恐怖心が百パーセントだったのに：今では、逆にそれを取り込んでやろうと、黒の液体を待ち望む気持ちが大割くらい、死への恐怖が四割くらい：となった。もちろんその四割も、時が経つにつれて和らいできたし、相変わらず私を心配して支えてくれる朱里の存在で、そのほとんどがかき消されていた。

表面上は、私の異常性は解消されたように見えるに違いない。事実：気は随分と楽になっていた。しかし、黒の液体の再来を待ち望む気持ちは、日に日に強くなっていく。

(：次に対峙したとき：私はアイツを取り込んで：死と同じものになって、恐怖を取り除くんだっ！)

またしばらくたつと、これが私の思考のほとんどになった。そして、これが私の生きる目的となった。

「今日も何も起こらない…」

「今日もアイツには会えなかった」

「今週もアイツが来るような機会はなかった」

「今月も何もない…」

私はアイツとの対峙を待った。ただひたすら待つ。黒いゲル状のアイツは、私の死のすぐそばにいる。私が死に接近するとき：また現れるに違いない。：いつまでも：待ってやる。

一年後…。

「…あやちゃん…もうすぐ…だよー」

夏休みを利用して、学校の行事で海へ行く。保護者会と生徒会、学校が組んでの行事だが、自由参加のため、出席人数は各クラスの半数程度になる。当の私も去年は、

「行きたくないーっ」

と、駄々をこねて欠席していた。

毎年このような企画が催されて、今年は生徒会の提案で海になった。天草は牛深町の海水浴場に向かっている。少し距離はあるが、車に乗って日帰りで行ける距離にある。

最近の私は：周囲からはとても元気になって、本来の勝気で強気の姉御肌の文に戻った、などと言われている。だが、内心はかつてと何も変わっていない。今でも、まず第一にアイツに再会して：と考えているし：一人になって、ふと死への恐怖に怯えて震え

ていることもある。しかし、たまに…ずっとこのままでもいいかもしれない…と思うほど、思考や感情は一応の安定を保っていた。私をもっと近くで見ている朱里も、未だ心配はしてるものの、

「あやちゃんが…元気だから…私…嬉しいんだ…」  
と、ここ一年…ことあるごとに言う。

彼女は私を支え続けてくれた。彼女の存在は、私にとってなくてはならない存在のままであった。たった今も私の横に座っている彼女は、

「…去年…あやちゃん来なかった…から」

「今年は…一緒だね！…私、あやちゃんが元気だから…嬉しいんだ！」

と、また似たようなことを言っている。…思えば、私は朱里に迷惑をかけたばなしだ。黒のアイツと片が付いたら、彼女に恩返ししなきゃ。これもこの一年間、ずっと思いつけることだった。

「…朱里…ありがとう…」

まだ片はついていない…ボソツと独り言のように言った。彼女は微笑を返事として返してくれた。

八月の前半、日差しは強く、雲一つなく晴れていた。海の浜辺には、すでに大勢の人々がごった返している。日差しの他に、パラソルや水着にある多種多様な色が目を奪う。はしゃいで泳ぐ小さな子供達の声が聞こえてくる。私たちは、とりあえず水着に着替えて、昼食を取ることにした。気が早い子は、すでに海に泳ぎに出ていたが、朱里と私はビーチパラソルの下で寝そべっていた。…朱里も私もろくに泳げなかったからだ。朱里が言う。

「…去年も…その前の年も…泳ぐ練習しようって言ったのに…忘れてたね…」

「泳げないけど…水辺で遊ぶくらいはできるし、まあいいじゃない」

私は、んーっと伸びをしながら答えた。

「食っちゃ寝、食っちゃ寝つても悲しいから…少しは海に出ますか」

そう言っつて、朱里を誘って海に入る。ボールや浮き輪を持ってきて、足がつく程度のところで遊ぶ。

今日は本当に日差しが強い…でも、海の水はそれを失わせるくらいの…適度な温度で私たちを包む。独特の塩辛さが口の中を刺激する。…海に入るというのは、これでしか味わえない体感の具合がある。

そこらじゅうにいる人たちの間をぬって、少しずつ深いところに移動しながらも、その体感を味わう。海の中は…あの黒いゲルとは正反対で、なにかしらの感覚がある。…とても心地良い。

私は精神を集中して…私に触れて、私を満たしている海水を…逆に取り込むような心持ちになってみた。目を瞑って、聴覚と味覚を無視してみる。海の触覚だけが残る。

(…似てる？あの時と似てる…かな…)

私は心を強く集中させて…体を動かさずに、心を動かしてみた。周囲の水を取り込んで、私のものにするように…。体は水面に浮く。

「…なんだ、これで足を動かしたら、泳げるんじゃないの??」

集中が途切れた私は…水への浮き方を学んでいた。遠くから朱里が叫ぶ。

「…あやちゃーんっ!あまり遠くへ行くと…危ない…よっ!!」

「わかってるーっ!!」

私は大声で答えて、さらに数時間同じようなことを繰り返した。

四時ごろになって、ようやく浜辺にあがる。朱里は驚いたような表情で私を見る。

「…あやちゃん…?泳げるんだ??」

私は少し得意げになって、

「ううん、すこし浮き方がわかっただけ」

と答える。

「体の力を抜いて静かにしてれば、勝手に浮いてきたんだ。あとは足をバタつかせれば、ちよつとずつ前に進むみたい…」

朱里は普通に感心している。

「…私もやってみる!!」

と、海に向かっていった。私はその姿を笑って見て、パラソルの下へ戻る。

うちの小学校の子供たちが、海から上がって一休みしていた。引率の親の一人が、「正ちゃんと卓ちゃんの姿がさつきから見当たらなくて…。文ちゃん、よかつたら朱里ちゃんと一緒に探してきてくれないかしら?…遠くに行つてないといいんだけど…」と、かき氷を食べながら…他のお母さんたちと話しながら言う。彼女は私の返事を聞くよりも早く、話題へと戻っていった。…まったく世のお母さんたちは、どうしてこうも話好きなんだろう。私は、

「うん、わかったー」

と返事して、トボトボと海へ向かっていった。ふと海面を見ると…朱里がガボガボと溺れていた…。

「…いないねー」

テトラポットの上から、一通り浜辺を見渡しても、二人の姿は見えなかった。

「…あの岩場の向こうにでも…行ったのかな??」

朱里が指差した先には、浜辺を仕切るかのように岩がある。それは人が登れそうなくらいのもので、岩盤というほどのものでもない。

浜辺を挟んで…指した岩の逆側が今いる場所で、テトラポットが多数置いてあり、ここでも浜辺を仕切っている形になっている。浜辺の後方には道路があるのだが、高いところにあるため、階段を介さないと道路側には行けない。階段の前にはお母さんたちが陣取っている。いくら話に夢中でも、そこを通ろうとすれば気付くはずだ。

テトラポットの仕切りの向こう側は…ずっと浜辺が続いているが、ここから見渡せて、人がいるスペースもある。そこかとも思ってたが、見当たらなかった。

「うん、あの岩場のほうしか…思い当たらないね」

私は朱里に答える。

「行ってみようか」

朱里の手を引つ張って、浜辺を横断する。彼女は辺りを見回しながらついてくる。岩場に着くと、手ごろな場所に手や足をかけて、よいしょ！と、気合を入れてよじ登った。

「岩に体をぶつけないよう注意して」

私は朱里にそう言って、先に登り、朱里を上から見ると、その時だった。

「あ、…あやねーちゃんっ！！」

私は後ろから呼ばれて、すぐに振り向く。そこには正ちゃんがいた。岩場はそこそこの距離続いていて、数メートル先にある岩の上に彼はいた。彼は焦った口調で、叫ぶように言う。

「た、卓ちゃんが…海に落ちて溺れてるんだっ！！助けて！あやねーちゃんっ！」

彼が指し示した先にある海面には…男の子がもがいている姿があった。足を滑らして落ちた??その海場は深そうで、岩に当たって弾ける波は、とても強そうだった。私はすぐさま岩場の下にいる朱里に、

「朱里ッ！！卓ちゃんが溺れてる！私はどうにか…助けるから、朱里は大人の人、呼んできてッ！！」

と早口にまくし立てるように言う。朱里は、

「…わかった！！…あやちゃん気をつけてっ！！」

と答えて、焦った様子で砂浜をパラソルの方へと走っていく。それを確認すると、

「正ちゃん、下がって！何があっても…ここを動いちゃダメよ！！」

と言い放って、すぐに…卓ちゃんの場所を確認して、岩場から数メートル下の海面に飛びこむ。鼻をつまんで、足を抱きかかえて丸くなって…。

「ザブンツッ！！」

耳の聞こえ方が水中のものになり、視界が薄くなる。卓ちゃんは数メートル先で、ゴボゴボともがいていた。水着の上に着たTシャツが水を吸って急激に重くなる。

(…しまった…脱いでくるべきだった…)

しかし、そんなことを考えてる暇はない。卓ちゃん的位置を再確認して…体を浮かして手足をばたつかせてみる。波が辺り一面の海を掻き混ぜて、思うように進めない…。が、少しずつ、少しずつ卓ちゃんに近づく。

私が待ち望んだ瞬間…黒いアイツとの再会は…その直後だった…。なんとか卓ちゃんに近づいた私は、彼を抱きかかえる…しかし、彼はパニック状態のまま、私のTシャツにしがみつき暴れ出した。

「卓ちゃんっ！！もう大丈夫だからっつ！落ち着いて！！暴れないでっ！！」

大量の海水を飲みながらも、彼を落ち着かせようとする。が、それは無駄な行為だった。彼が暴れるのをなんとか押さえつつも、岩場のほうへ近づこうとする。

…その時、一際大きな波がザブンと押し寄せ、私と暴れる卓ちゃんを大きくさらった。私はその波にのまれて…上半身を背中から岩盤に、したたかに叩きつけたのだった…白くなる視界の中で…なおも彼は暴れていた…。私は大量の水を口に含んで…すべての感覚が遠くなっていた。…これが私の海中救出劇の最後の記憶となった。

私は自分の体を失っていた。…触感や視覚は何もなく…聴覚も…何も感じない。…だが不思議とわかる。

「…あの時と同じだ」

…私の記憶のほとんどはぼんやりとしていた。だが…一つだけははっきりと覚えていることがあった。アイツとの再会、アイツとの対峙…アイツとの同化…アイツを取り込むッ！！この時が…私が待ち望んでいた瞬間…。

(きつと…次にその黒い液体と対面した時が、あなたの人生の正念場になる…)

もうこの人の顔も、声も、聞いた場所も…思い出せないけど…その誰かさんの言葉が頭に響いて、私は反応した。

「…ここが私の…正念場ッ！！」

心構えを改めて、アイツを持つ。

「わ…私はお前を取り込んでッ…そして…お前に満たされる…同じもの…になってやるッ！！」

心を強く強く強く持つ。もはや…体もないクセに…拳を握りしめるようなつもりで気合を入れる。そしてさらに言葉に力を込めた。

「さあ来いッ！黒のバケモノッ！！」

私はその概念もないクセに…目を見開いたようなつもりで言った。

それは五感を失い、ただ考えるだけの存在となった私の前に現れていた。…すでに私が気付くと同時に、目の前に出現した…まるで私の認識が…今ここに作り出したかのように。私に体があったのならば…ゴクリとつばを飲んでいただろう。黒のバケモノと対峙して…思考の中に、恐怖と絶望が溢れ出てくる。…以前と同じように。

私は恐怖と絶望を必死で押さえつけ、心の中を落ち着けて…私は黒のバケモノを飲み込むような、今までに何百回とシミュレーションした心持ちになってみせる。

…黒のバケモノとの近さが徐々に迫る。…ここからが前回とは違う。…なにか雨が降っているかのように水滴のようなものが、ポツポツと思考の中に意識される。私はその水滴を思考から追い出した。

「ッッ！邪魔するなッ！」



うにプツンと消えた。

…コンコン。

「あやちゃん：？：？：？…：…入るよっ！」

ノックされてから…：しばらく経つと、勢いよく…扉をバタン！と開けて、朱里が病室に入ってきた。彼女は汗だくで、赤い帽子を被って手にはリンゴのかごを持っている。

「あかり…あんた、まるで赤頭巾ちゃんじゃない…」

私は薄っすら笑って言った。…一夜明けて今日。昨日と変わらないくらいの日差しから、外の暑さは窓から外を見るだけで容易に想像できる。朱里は、

「…うん、お外は暑くてさ…ここは涼しいねー。…寒くない？…大丈夫？？」

と、リンゴを向きながら私を気遣う。

病室…：昨日、海で溺れた私は、そのまま病院に搬送され、九死に一生を得た。医者の話では、あそこで一度意識が回復しなければ…：悪ければ植物人間状態…：というほど危なかったらしい。

背中を岩盤に叩きつけられたことよって溺れた私は、酸素が足りない状態になって、さらに波にさらわれて、何度も岩盤に叩きつけられて…：海に沈んでいくところを、黒川先生に助けられたらしい。

先生は朱里に耳元で叫ぶように指示して、的確に応急処置を取り行ってくれたそうだが、助けに入った卓ちゃんの方も、器官に多量の海水が入って、危ない状態だったそうだが、同時に病院に運ばれて処置され、命に別状はないとのことだった。

朱里が、

「…はい」

と言つて、リンゴの乗ったお皿を手渡す。私はそれを無言で受け取って、口に入れる。確かな味覚が口に広がる。そして思い返す…。

私は、あの黒の化け物と再会して…：ベンチの少女の言った通り、ヤツと同じものになるため、ヤツを取り込みながらも…：その一部として満たされていった…。…でも、途中でそれは遮られた…：水滴のようなものが降ってくる認識のあとに…：朱里の声が聞こえた。そして…：ほぼ同じものと化していた私とアイツは、強引に引き裂かれた…。私の意識には、そう記憶されていた。

「…失敗しちゃったか」

声を出すつもりはなかったが、つい声に出してしまい…：私はそう言った。朱里は…？…？という顔になって、オーバーテーブルに両肘をついて、こっちを見ている。

アイツと同じものになる…：ということは失敗した。だが、実は当初の目的は、ほぼ完遂されたと言つてよかった。他でもない…：死への恐怖心を克服することである。

おそらくあの黒いゲル状のもの…：黒のバケモノは、死そのものに違いない。私は黒のバケモノに二度も会って…：しかも二度目は、アイツに打ち勝つかのごとく、あいつを逆



「…うん…わかったよ!!」

二人して笑った。ずっと長い間忘れていた。本当に嬉しいから…本当に喜んでるから笑うという行為。何も不安なことがないから、何も心配することがないから、笑うという行為。何よりお互いを信頼しているから…これ以上ないというくらいの親友だからこそ…一緒になって笑うという行為。

心の持ち様と準備…この二つさえしっかりしていれば、人生の難所に遭遇しても対処できる。それは、世界のあらゆる生命体に早かれ遅かれ訪れる…生命最大の正念場…死、であつても同じことだ。

人は年を取るにつれ、価値観や思想を柔軟に変化させる。それは私も同じであつた。私はいずれ死にゆくという現状は同じままで、自らの準備を手段という形で整えて、心の持ち様をしっかりとらせることで、自分が持つ価値観と思想を変化させ…死への恐怖心を鎮圧することに成功した。

…そう、私は…黒のバケモノとその先に控えているであろう…現象への恐怖を、完璧に拭い去った。そして、その後に残ったものは…ただ親友を想うという感情であつた。